

サウンド ボックス

バッハから現代まで 西洋音楽の旅

たさきえつこ
「田崎悦子ピアノ大全集」第5夜



たさき・えつこ 東京都生まれ。米ニューヨークのジュリアード音楽院に学び、1970年のプルーニ、71年のリスト＝パルトークの両国際コンクールで上位入賞し、世界的なキャリアをスタート。79年にゲオルグ・ショルティ指揮シ

カゴ交響楽団とパルトークのピアノ協奏曲第2番を演奏してセンセーショナルな成功を収めた。幅広いレパートリーを誇り、「大作曲家の遺言」「ピアノ・マラソン」などテーマ性の高いリサイタルシリーズでも人気を得ている。

 www.etsko.jp

作曲家、作品に対する強い共感に貫かれた詩的なピアノで、圧倒的な世界を創出させる。若くしてニューヨークに渡った田崎悦子は、ルドルフ・ゼルキン（1903～1991年）、ミエチスラフ・ホルショフスキー（1892～1993年）ら巨匠ピアニストたちの薫陶を受けて、ヨーロッパの伝統に根ざした芸術観を会得し、ジョン・ケーシやグレン・グールドをはじめとする20世紀の北米生まれの創造者たちの活動を肌で体験して、重厚で堅牢な構築性と知的冒険を志向する大いなる精神を併せ持つ。

感性の翼を広げる

「ピアノに向かう一番の理由は、作曲家や作品に対する恋愛にも似た感情。衝動のようなものに突き動かされ、音楽の中へ深くのめりこむほどに、日常の世界とは違う、全く知らなかった国や時代に自分がいることを感じ、とても幸せな気持ちになります」その思いは渇きにも通じる痛烈な情動とも語るが、一昨年秋から始めた「田崎悦子ピアノ大全集」は、広範な精神世界にしなやかな感性の翼を広げる田崎の真骨頂。全6回のリサイタルで、ピアノや鍵盤楽器のために書かれた名作の数々に立ち向かい、*音楽の父、バッハから21世紀の現代までの西洋音楽の歴史を貫通していく。

「最初は、こんなことができたらずいいと、冗談を言いながら、ひとつごとくのようにとらえていました（笑）。でも、いつもプログラムを考えるときに、常に新しい作品を取り入れて挑戦を続けてきましたから、ひょっとすると自分でできるかなと、大それたことを考えてしまったんです」

田崎はリサイタルシリーズのプログラミングについて、「これまで深く愛してきた数多くの作曲家たちに加え、この人もすてきね、と思える作曲家の作品も集めた」と語り、こう続けた。

「第1夜で取り上げたバッハと同じ年のドメニコ・スカルラッチェは、本当に驚きの世界。こんな輝かしい、素晴らしい音楽を書く人間が生まれ、育った南イタリアのナポリがどんな社会だったのかを知りたくてしょうがなくになりました。音楽以外のさまざまな事柄に触れるうちに、映画でも見ているような楽しい気持ちになり、この世界を「映画館」の中でずっと楽しんでいたいと思えるほどになりました」

さらに、「いろんなことに興味を持ち、作品が謎めいているほどに気持ちが高ぶる」と、いたずらっぽく笑う。「いつも発見というより、驚きの連続。準備は大変だけど、それ以上に楽しい」と、自ら計画したリサイタルシリーズを心からの喜びとしている。

「世紀のかけ橋」

第5夜（回）は21日にシリーズの本拠を置く東京・上野の東京文化会館で開く。テーマは「世紀のかけ橋」だ。19世紀から20世紀にかけての、絵画も含めたすべての芸術の転換期に出現したベルク（オーストリア、1885～1935年）やラフマニノフ（ロシア、1873～1943年）、ドビュッシー（1862～1918年）といった作曲家の「偉大な作品」を取り上げる。

「前はショパンを演奏しましたが、そのショパンに強いあこがれを示していたドビュッシーの前奏曲集第1巻はすべてが詩とっていい世界。ベルクのソナタも前回のリストと同様の構造を持ち、細密な構造をめぐらせた複雑さの下に本当の美が潜んでいます」と心からの共鳴を示すとともに、「ラフマニノフは異常なほどにロマンチックで病的なほどに美的な世界です」と語り、さらに濃密な感興が田崎の胸の中にあふれ出ているようだ。

文 谷口康雄
写真 大山実

ガイド

田崎悦子ピアノ大全集第5夜 21日午後6時半開場、午後7時開演。東京都台東区上野公園の東京文化会館。ベルク「ソナタ」、ラフマニノフ「楽興の時」より、ドビュッシー「前奏曲集第1巻」。全席自由5000円。学生は3500円、ペア券は9000円。問い合わせは、コンサートイマジン ☎03・3235・3777。

MOSTLY
CLASSIC

月刊音楽情報誌「モーストリー・クラシック」より